

1P13

大学内0～2歳児保育施設における食物アレルギー除去のための全園児同じ献立の取り組み

中原 初美¹、工藤 佳代子¹、高野 貴子²¹東京家政大学ナースリールーム²東京家政大学家政学部児童学科

【目的】

日本の食物アレルギーを有する乳幼児の割合、また保育所における食物アレルギーを有する子どもの割合は増加傾向にある。一般的に保育所では食物アレルギーを有する子どもについては、アレルギーとなる食品を除去した「除去食」を当該園児にのみ提供する。こうした対応では、食物アレルギーを有する子どもは他児と異なる給食を食べることになり、子どもの心理的負担や、誤食を避けるための園側の負担、誤食の事例など様々な問題点が挙げられている。本研究では、ナースリールームで行っている全園児同じ献立での食物アレルギー対応の利点と問題点、限界を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】

最近13年間のナースリールーム在園児全員（健常児と食物アレルギーを有する児全員）に同じ献立で提供している給食を対象とし、生活管理指導表及び入室時アレルギー調査表、保護者との面談記録、給食の献立、給食日誌、給食日より、給食会議記録を調査した。研究に先立ち、東京家政大学研究倫理委員会の承認を受けた。

【結果】

ナースリールームでは、2009年より食物アレルギーを有する子どもだけでなく、全園児同じ献立の給食を提供している。そのために、食物アレルギーを有する子どもが在籍している時は、そのアレルギーを完全除去した献立で、昼食、午後のおやつ共に、施設内の調理室で手作りで提供している。利点としては、誤食リスクの低減、作業負担の軽減、食物アレルギーを有する子どもの精神的負担の軽減などが挙げられる。一方、この給食を行うには、ナースリールームが給食の基本方針としている和風の食事に大きな変更が必要となる場合があること、また、献立と調理上の細やかな工夫が必要であることなどが明らかとなった。

【考察】

全園児同じ献立の給食は、食物アレルギーを有する子どもだけでなく、全園児にとって食べやすく楽しい給食となっている。しかし、この取り組みが可能となっている背景には、ナースリールームの定員数が少ないこと、これまで食物アレルギーを有する子どもの在籍人数、食物アレルギーが限定されていたことがある。よって、定員、在籍人数が多い施設ではこのような取り組みは難しいかもしれない。また、ナースリールームは0～2歳児の保育施設であり、より高い年齢の子どもを対象とする保育施設では配慮すべき事項が異なるため、全園児同じ献立の問題点も変わってくるであろう。

1P14

幼児の偏食等の食の困りごとに対する保育現場での食生活支援のあり方の検討—「幼児期の健やかな発育のための栄養・食生活支援ガイド」の効果的な展開に向けて—

鈴木 美枝子¹、近藤 洋子¹、仁藤 喜久子²、衛藤 久美³¹玉川大学²仙台白百合女子大学³女子栄養大学

【目的】

著者らは、子どもが偏食を解決していくプロセスについて明らかにしてきたが、本研究では、保育施設において、子どもの偏食等の食の困りごとが解決に向かった好事例から、保育現場での食生活支援のあり方について検討し、「幼児期の健やかな発育のための栄養・食生活支援ガイド」を効果的に展開するための基礎資料とすることを目的とする。

【方法】

2021年3月、食育活動を積極的に行っているとされる保育所・認定こども園等にて、中心的に食育活動を推進している教職員（副施設長、栄養士、調理員、保育士）を対象に半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は、偏食等の様子と解決に至るまでの子どもや保護者への支援等である。インタビュー内容は、逐語録として文書に起こした上でM-GTAの方法を参考に内容の整理を行った。本研究は女子栄養大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

【結果】

インタビュー内容から10の概念と5のカテゴリーを生成した。概念同士やカテゴリー同士の関係性から、保育施設での偏食等の食の困りごとへの支援としては、【子どもが食べたいと思うポイントを探】り、【子どもの意思を引き出す働きかけ】を行い、【子どもの好きな食感を探る】ことで、食べられるものの食感の共通点を見出し、似たような食感のものを提供したり、【盛り付けの配慮】をして【一定期間の配慮を経て食べられるかどうか確認】していた。また、お腹が空いてから食事となるよう食事時間を変える等【生活リズムの調整】を行っていた。看護師や栄養士、調理員、保育士などによる【多職種連携】をしながら【保護者に園での子どもの様子を具体的に伝え】、食事づくりが苦手な保護者には【保護者へのレシピの提供】をし、園で食べられるメニューを伝えていた。またこうした支援をしつつ、子どもの成長を見守り【気長に待つ姿勢】を心がけていた。

【考察】

保育施設で偏食等の食の困りごとを支援していくには、子どもをよく観察し、子どもの食べてみようと思う意思を丁寧に引き出す関わりが求められる。また十分にお腹が空いてから食事時間となるよう生活リズムを調整することで、食への意欲を引き出すことができることが示唆された。園内の多職種が連携し、保護者に園での子どもの様子を具体的に伝えることで協力関係を築きながら支援していくことが求められる。